

金剛般若の法滅句

渡 辺 章 悟

はじめに

ここでいう法滅句とは大乘經典にしばしば説かれる「如来滅後後五百歳、正法欲滅時」とか、「仏滅後、後五百歳」(anāgate 'dhvani paścime kāle paścime samaye paścim-āyām pañca-śatyām saddharma-vipralopa-kāle vartamāne)とか言われるもので、大乘經典の成立に深く関わる成句である¹⁾。すなわち、この表現は、仏陀の入滅した後、500年たってその教えが消滅してしまうという、仏教の存続を危ぶむ表現であり、同時にその時期こそが大乘經典成立の時代を示唆しているというものである。しかし、大乘經典を精査すると、この定型句が同一の經典であっても異訳諸本によって必ずしも一致していないことがわかる。そのため、この法滅句の位置づけが確定できないという状況であった。

そこで本稿では、初期大乘の代表的經典の一つで、多くの異訳を持ち、且つ特徴的な法滅句を述べる『金剛般若経』を考察の対象とする。なぜなら『金剛般若経』は重層的構造を持ち、「法滅句」の定型句成立の経緯を検討するのに適しているからである。この検討によって、大乘經典の成立と法滅句の定型化が深い関わりを持っていること、及び、この「法滅句」が持つ仏教思想史上の意義を解明するつもりである。

『金剛般若』の法滅句の比較

この定型句が見られるのは、諸の「般若経」類本、『法華経』、『思益梵天所問経』、『時世経』、『不増不減経』等の大乘經典である。平川彰は既にこれらの漢訳諸經典を分析し、「とくに古訳にはこの語(後五百歳)が現れていないことが多い。したがって、最初からこの語が大乘經典に存在したとみるよりも、途中からこの語が挿入されたとみる方が、妥当のごとく思われる」としている²⁾。その状況を本稿では『金剛般若』における法滅句に絞って考察するとしてしよう。

『金剛般若経』(Conze ed.)³⁾には全部で4例(6件)の法滅句が見られる。それを章節ごとにあげると、§6, §14, §16, §21⁴⁾となる。以下順次に、ギルギット写本やチベット語訳、漢6訳など異訳諸本と比較しながら検討する。なお、漢訳6本とは羅什訳(弘始4:402年)、菩提流支訳(永平2:509年)、真谛訳(天嘉3:562年)、達摩笈多(開皇10:590年)、玄奘訳(顯慶5:660年—龍朔3:663年)、義浄訳(長安3:703年)である。

〈第1の用例 §6 Skt: Conze ed., pp. 30-31〉

第1例(§6)に含まれる法滅句の箇所は、仏陀とスプーティとの対話であり、同じことばで三度繰り返されているため、それをローマ数字で区別した。なお、それぞれは意味上(1)から(4)の四つに区分してあり、その中の下線部は法滅句の定型的部分である。

I. このように述べられたとき、長老スプーティは、次のように世尊にお尋ねした。

「“そもそも世尊よ、(1) 将来、後の世、後の時代、(2) 後の五年間に、(3) 正しい教えが滅びつつあるとき、(4) これらの經典の言葉がこのように説かれたとして、〔それに〕真実という想いを起こすところの人々が、誰がいるのでしょうか？ (*anāgāte 'dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañcaśatyāṃ saddharmavipralopakāle vartamāne, ya imeṣv evamrūpeṣu sūtrāntapadeṣu bhāṣyamāṇeṣu bhūtasamjñām utpādayiṣyanti*)”」

II. 世尊は答えられた。「スプーティよ、あなたは“そもそも、(1) 将来、後の世、後の時代、(2) 後の五百年間に、(3) 正しい教えが滅びつつあるとき、(4) これらの經典の言葉がこのように説かれたとして、〔それに〕真実という想いを起こすところの人々が、誰がいるのでしょうか”と云ってはなりません。

III. そうではなく、スプーティよ、(1) 将来、後の世、後の時代、(2) 後の五百年間に、(3) 正しい教えが滅びつつあるとき、(4) 徳を備え、戒律を保ち、智慧のすぐれた菩薩摩訶薩たちが現れるでしょう。彼らはこれらの經典の言葉がこのように説かれるとき、〔それに〕真実という想いを起こすでしょう。」

ここに引用した「法滅句」は以下のような4つの構成要素から成ることがわかる。

- (1) 将来、後の世、後の時代、
- (2) 後の五百年間に、
- (3) 正しい教えが滅びつつあるとき、
- (4) これらの經典の言葉に信仰を持つものが現れる。

以上、4つの構成要素のうち、厳密には最初の3つが法滅句と呼ばれるべきであ

る。ただし、多くの場合(1)は、「[我が]涅槃の後」、「仏滅後」、あるいは簡略に「滅後」や「当来世」などとすることもある。この(1)と(2)は時代規定であるが、(2)「後の500年間」という語句は必ずしも具備されない。

法滅句は仏説の形式をとるが、ここでは仏陀がスプーティに、未来の[500年後の]時期について予言するという設定である。もちろんそれはこの定型句の成立を軸にして考えるべきであるから、ここでいう「将来、未来」とは現在、すなわちこの教説が初めて聴聞される時期、あるいはこの法滅句が成立した時代を指定する。その場合、現在から「500年後」と言うときには、現在から「500年前」のことを指示しているということになる。したがって、この法滅句が經典成立の最初から含まれていたとすれば、紀元前後とされる大乘仏教の成立と年代的に重なりと推定されるわけである。

(3)の「正しい教え」とは言うまでもなく、釈尊以来の伝統的教説であるが、この場合は(4)で言及される教説と対峙する。一方で、[仏滅後の500年間に]滅しつつある仏教の教えについて危機感を持ちつつ、その時代にあっても徳の高い智慧を持った菩薩によって受け容れられる真実の教えがあることを鮮明にする。その教えこそ、今ここで新たに明かさつつある教え、すなわち大乘であるとする。

そして本経ではこの後に、この經典の教えを受容できる菩薩は、過去世において仏陀に帰依し、善根を植えたために、清らかな信仰を得ることが出来るのであると続く。このように法滅句と大乘の宣揚とが一体になっていることから分かるように、この定型句の意義は、最後の構成要素(4)を除いて考えるべきではないのである。次いで、諸本間の異同を検討してみよう。〔紙幅の都合上、出典箇所そのものは省略する〕

Tib: Lhasa No. 18, 217b4-218a2: Peking No. 739, 163a7-b3.

Ch: 羅什訳, No. 235, 749a28; 菩提流支訳, No. 236 (1), 753a24; 真諦訳, No. 237, 762b24-c2; 笈多訳, No. 238, 767b7-16; 玄奘訳 No. 220, 980c3-10; 義浄訳 No. 239, 772b4-9.

まず、最も発達した法滅句を備えるサンスクリット本は「(1) 将来、後の世、後の時代、(2) 後の五百年間に、(3) 正しい教えが滅びつつあるとき」という五百年の法滅の定型句に言及し、最後に(4)「徳を備え、戒律を保ち、智慧のすぐれた菩薩摩訶薩たちが現れ、これらの經典の言葉に真実という想いを起こすでしょう」云々と続ける。チベット語訳は、(1)が「未来の時 (ma'ongs pa'i dus lnga)」と簡単になっている以外は、サンスクリットとほぼ等しい。

この法滅句は諸本間によってヴァリエーションがあるが、基本となるのは(1)

と(4)の趣旨である。なぜならこの箇所のみは諸本すべてに共有されており、そこに本来の文脈を読みとることが出来るからである。我々はその中にこの定型的章句の意図を見いだすべきなのである。

まず、最古の漢訳である羅什訳をみると、I、II、III段がそのまま繰り返されず、IIIにのみ法滅句が記されている。おそらくこれが初期の形式であったのだろう。次に漢訳で古いグループに属する流支訳や真谛訳は、IからIIIにかけての内容が次第に詳細に記されるようになる。ところが、チベット語訳、笈多訳、玄奘訳、サンスクリット本等の比較的新しい文献をみると、IからIIIはまったく同型であることから、この三段の章句が時代を経るにしたがって、次第に整えられ、定型化されていった跡が窺える。この展開を格段毎にさらに細かく見て行こう。

まず最初のI段は、スプーティからブツダへの問いである。羅什訳では「ある衆生がこの教えを聴聞する」(有衆生得聞如是言説)としているが、それ以外の諸訳ではそれが「未来」のことであるとはっきり規定しているという相違があり、この段だけを見ても、羅什訳が独自性を伝えていることは明白である。

次に、義浄訳「(1) 於當來世 (2) 後五百歲 (3) 正法滅時」とチベット語訳「(1) 未來の時、(2) 最後の五百年間に、(3) 正しい教えが減びつつあるならば (ma 'ongs pa 'i dus lnga brgya tha ma la dam pa 'i chos rab tu nam par 'jig par 'gyur ba na)」の2本は等しく、笈多訳「(1) 未來世。後時後長時。(2) 後分五*十。(3) 正法破壊時中。轉時中。」と玄奘訳「(1) 於當來世後時後分 (2) 後五百歲 (3) 正法將滅時分轉時。」とサンスクリット本の3本が同型である。この二つの系統はよく対応しており、(1)の箇所で前者が簡略であるのに対し、後者では詳しくなっている点が異なるのみである。

なお、(2)の年代規定に関して、後者の笈多訳は「五十」(pañcā-śat, pañcā-śati)となっているが、その他のすべては500とする。しかも笈多訳でも元本・明本では常に「五百」(pañca-sata, pañcaśati)である。おそらく、異読 pañca-śati を pañcā-śati 「五十」とした誤読であろうが、「五十」と「五百」という二つの伝統がかなり古くからあった可能性もある⁵⁾。

第II段では羅什訳以外の他の諸本すべては共通して、第I段のスプーティの問いをそのまま正確に繰り返しつつ、それを否定している。したがって、第I段で言及した笈多訳・玄奘訳と義浄訳、チベット語訳、及びサンスクリット本はここでも同様の形式を備える。しかし、羅什訳のみはこのスプーティの問いを、世尊が「是の説を作す莫かれ」といって簡潔に否定するのみで、古い形態をうかがわせる。

問題は第Ⅲ段である。この部分はブツダがスプーティに、「(1) 将来 (あるいは、如来の滅後), (2) 後の五百年代に, (4) よく戒を保ち、福德を修行する者がいて、この教えに対して信心をもつであろう」と予言する、という文脈である。(4) はすべての諸本に共通するが、(1) から (3) までの狭義の法滅句を見ると、古い訳である流支訳は「(1) 有未來世末世。(有菩薩摩訶薩。) (3) 法欲滅時」として、(3) を加えるが、逆に最古の訳である羅什訳は「(1) 如来の滅後, (2) 後の五百歳」とし、この經典が信仰される時期 (2) を明確に規定する⁶⁾ が、(3) はみられない。これに対し、真諦訳はこのⅢで初めて「(1) 未來世, (2) 後の五百歳 (宋本と宮本とは五十歳とする) に於いて、(3) 正法の滅するとき」といい、(2) と (3) を付加する。この形式はチベット語訳と一致する。さらに、最も新しい訳である笈多訳・玄奘訳とサンスクリット本は、I, II と変わらない詳細な (1) を備えた形式を記し、翻訳年代が下がるにつれて、詳細になっていることがわかる。なお、この箇所に対応するギルギット写本 (Gil)⁷⁾ 中央アジア写本⁸⁾ は存しない。

《第 2 の用例 §14b Skt: Conze ed., p. 40》

「しかし、世尊よ、この法門が説かれているとき、[それを] 受け入れ、信をおくことは、私にとってむづかしいことはありません。しかし、世尊よ、(1) 将来、後の世、後の時代、(2) 後の五百年間に、(3) 正しい教えが滅びつつあるとき (*anāgate 'dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyām pañca-śatyām saddharma-vipralope vartamāne*), (4) 世尊よ、この法門を取り上げて、受持し、誦誦し、学修し、他者のために詳しく説明する人々、彼らは最高のすばらしい性質を備えた者となるでしょう。」

Tib: Lhasa 224a1-a3: Peking 167b5-b7.

Ch: 羅什訳 750b4-6: 流支訳 754b19-22 真諦訳 763c21-24: 笈多訳 768c21-25: 玄奘訳: 982b9-13: 義浄訳 773b12-14

この引用で諸本間に共通するのは法滅句 (1) の部分と、この經典 (『金剛般若』) を受持する功德を保証する (4) の部分を基盤とする。(1) から (3) までの狭義の法滅句を見ると、羅什訳と玄奘訳以外の漢訳諸本は共通して「未來の世」と規定するのみである。これに対し羅什訳は「(1) 当來の世, (2) 後の五百歳」という (2) の年代規定を付加し、玄奘訳は「(1) 於當來世後時後分 (2) 後五百歳. (3) 正法將滅時分轉時。」といい、(1) を詳細に記すばかりか、(3) 「正法の滅」に関する語句をも付加する。これはサンスクリット本と一致する完全な定型句である。このように Conze 本と玄奘訳の二つのテキストは常に一致する。なお、チベット語

訳は「(1) 後の世, 後の時代, (2) 後の五百年間に」(slad ma'i tshe slad ma'i dus lnga brgya tha ma la) といい, (1) がやや詳しくなっているが, (3) 「正法の滅するとき」を欠き, 羅什訳に近い。

一方, ここに対応するギルギット写本 (Gil. 5b1-2) をみると, この法滅に関する定型句 (1) から (3) が完全に削除されている。このことからこの狭義の法滅句の用例はもともと存しなかった。そして, (4) の經典受持の功德について言及する際に, 法滅句を添加していった可能性が高い⁹⁾。また, 羅什訳の「後の五百歳」という時期の規定は必ずしも原文にあったことを保証するものではない。この箇所の法滅句の用例全体を見る限り, やはり, 最初に (1) の部分が付加され, 次第に (2) (3) と添加されていったと推定すべきであろう。この意味でも (1) と (4) の部分こそが法滅句の主旨として重視されるべきなのである。

〈第3の用例 §16b Skt: Conze ed., p. 45-46〉

「スプーティよ, 私はこれら諸仏・世尊に仕えて喜ばせ, 仕えて喜ばせはしたが, 背くことはなかったが, しかし, (1) 後の世, 後の時代, (2) 後の五百年間に, (3) 正しい教えが滅びつつあるとき (paścime kāle paścime samaye paścimāyām pañca-satyām saddharma-vipralopa-kāle vartamāna), (4) このような經典を取り上げて, 受持し, 誦誦し, 学修し, 他者のために詳しく説明する者があるとすれば, スプーティよ, 実に前者の福德の集まりは, 後者の福德の集まりの百分の一にも及ばない。…」以下略

Tib: Lhasa 227a3-227a6 : Peking 169b7-170a1

Ch: 羅什訳 750c29-751a4 : 流支訳 755a20-24 : 真諦訳 764b26-c3 : 笈多訳 769c4-9 : 玄奘訳 983b16-21 : 義浄訳 774a6-9

これらを比較すると, 羅什訳と流支訳という二つの古訳は (1) 「於後末世」 「於後世 (元本: 於後) 末世」という簡潔な表現のみであり, 法滅句の形態としては祖型を示すが, それ以外の漢訳諸本 (真諦訳 〈留支訳〉・笈多訳・玄奘訳・義浄訳) は (2) 「五百 (十) 歳」という時期の規定を行う。特に新しい訳の笈多訳・玄奘訳・義浄訳は, これに加え, さらに (3) 「正法が破滅する時」という意味の語句を添加する。サンスクリット本もこの二つの漢訳と同じく, 完全な定型句を備え, その成立の新しさを示している。

一方, ギルギット写本は (Gil. 7b1-7) は (3) の部分を欠き 「(1) 後の世, (2) 後の五十年間が起こりつつあるとき (carime kāle paścimāyām pañcāsatyām vartamānāyām) とあり, チベット語訳 (phyi ma'i dus lnga brgya tha mar gyur pa na) と完全に一致

する¹⁰⁾。これは漢訳では真諦訳に対応する。

最古の資料である中央アジア写本は「(1) 後の集まり, 後の集まりが起こりつつあるとき」(carimi kāyām paścimikāyā vartamānāyām) と規定するが, 50年 (pamcāśatyām) と, 「正法が破滅するとき」(saddharma-vipralopa-kāle) の語はなく, 漢訳の古訳である流支訳とよく対応する。ここでも「後の500年間」と「正法の破滅」はもともと結びついて説かれていたものではなく, 独自の意図をもって別々に成立しながら, 法滅句として結びついていった。この状況をこれらの資料は示唆しているのである。

以上のことから, この第3の用例は(1)「後の世」の(4)「經典読誦の功德」を説く文脈を祖型としていた。それが漢訳の羅什訳・流支訳と中央アジア写本に窺われる。これから発して, (2)「[後の]500年間」という時期の規定が添加される。それがチベット語訳とギルギット写本, 及び真諦訳に見られるものである。さらにこの形式に, 笈多訳・玄奘訳・義浄訳という新しい漢訳や, サンスクリット本に見られるように, (3)「正法が滅するとき」の語句が加上され, 完成した形態となってゆくのである。

〈第4の用例 §21b Skt: Conze ed., p. 53〉

このように言われたとき, 長老スプーティは世尊に次のことをお尋ねした。

“世尊よ, (1) 将来, 後の世, 後の時代, (2) 後の五百年間に, (3) 正しい教えが減びつつあるとき (anagate dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyām pañca-śatyām saddharma-vipralope vartamāne), (4) このような〔理解しがたい〕これらの教えを聞いて, 信ずるような人が誰かいるでしょうか。”

Tib : Lhasa 231b3-b4 : Peking 172b8-173a2

Ch : 羅什訳 751c16-17 : 流支訳 756a16-17 : 真諦訳 765b26-28 : 笈多訳 770c15-18 : 玄奘訳 984c10-12 : 義浄訳 774c14-15

このように上に引用した法滅句は, はっきりと二つのグループに分けられる。一つはギルギット写本 (Gil. 9b5-6), チベット語訳, 漢訳の古訳である羅什訳・流支訳及び真諦訳というグループであり, もう一つはサンスクリット本, 及び笈多訳・玄奘訳という新しい漢訳のグループである。前者は狭義の法滅句では(1)「将来」という簡潔な言い方があるのみだが, 後者は「将来, 後の世, 後の時代, 後の五百年間に, 正しい教えが減びつつあるとき」という(1)から(3)までを備えた完全な定型句を持つ。このことから, 第1グループから第2のグループに展開した

経緯が窺えるのである。

具体的に示せば、最も初期の資料であるギルギット写本を始めとして、チベット語訳や羅什訳等の古い漢訳諸本のすべてが *anāgate 'dhvani (ma 'ongs pa'i dus na*, 於未来世) と簡潔な表現をとることから分かるように、もともとこの文脈はスプーティが仏陀に「将来、この經典に対して信仰を持つ者がいるのでしょうか」と質問し、それに仏陀が即非の論理を持って答えるというものであった。したがって、この文脈上、(2) (3) は殆ど不必要な語句なのである。このように、初期の文脈に、(2) と (3) の規定が付加された様子が見取れるのである。

結論

以上のように、『金剛般若経』は重層性を持った經典であり、そこに説かれる法滅句も、中央アジア写本・ギルギット写本や羅什訳・流支訳等の初期の形態をとどめるテキストから、チベット語訳・真谛訳を経て、笈多訳・玄奘訳、そしてコンゼの出版本に至るまで、次第に加筆、修正され、完成したものであることを確認した。

この検討によって、初期の『金剛般若経』に訳かれる法滅句は、もともと「未来世において、この經典（ここでは『金剛般若経』）が流布することを仏陀が保証する」という文脈であり、そこに「後の500年間」という時期の規定と、「正しい教えが当に滅せんとする時」の要素が次第に添加されたことが明らかとなった。

このような加筆が行われた最大の理由として、大乘經典の成立した時代、新たな仏教思想を鼓吹するために、仏陀の權威を導入したことがあげられる。それは論書が自説の教証を自身の教説の中に求め得ないのと同様である。当時すでに部派によってアーガマの權威が確立されている以上、新興たる大乘には新たに「将来、必ずやこうなるはずである」という説法形式、すなわち、仏陀の予言という形での仏陀の權威が必要であった。

この説法形式は既に仏陀の時代からの数百年を経た時代、新たな宗教運動を提示する者にとって適切な手段であろう。仏教の古い伝統は衰え、教団は混乱している。それこそが法滅の時代であることを示現しているのである。その時代であるからこそ、この新しい仏教の教えが現れる必然性があり、しかもそれを釈尊が保証しているのである。

そして、この法滅の意識の高まりに応じて、大乘の意義も高まるという構造の中で、「後の500年」という語句が措定され、「正しい教えが当に滅しつつあるとき」

という危機意識が強調された。以上が完全な法滅句へと修正, 加筆された経緯である。〔詳細は「インド仏教の法滅思想 I」『東洋学研究』37号に発表予定〕

- 1 この成句は大乗仏教の起源と重要な関わりを持つのであり, 望月信亨『浄土教の起源及発達』東京共立社, 1930, p. 309; 平川彰 (『初期大乗仏教の研究 I』〈平川彰著作集第3巻〉春秋社, 1989, pp. 157-162) もすでにこの問題に言及している。
- 2 平川彰, 前掲書, p. 161
- 3 E. Conze, *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, Serie Orientale Roma XⅢ, IsMEO:Roma, 1974.
- 4 梁の昭明太子による三十二分節であるが, 最古の羅什訳以来, 多くの研究者によって採用されている。コンゼもこれに基づいてサンスクリット本を校訂しているので, ここでもそれに従っている。
- 5 この問題については湯山明が詳細に論じている。Cf. Akira YUYAMA, *pañcāśatī*-, "500" or "50"? -With special reference to the Lotus Sutra-, in *The Dating of the Historical Buddha* (symposium zur Buddhismusforschung, IV, 2), edited by Heinz Bechert, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1992, pp. 208-233.
- 6 「500年」という時期の規定を行うのは羅什訳の特色である。あるいはこれは羅什の潤色かも知れない。
- 7 G. Schopen, The Manuscript of the Vajracchedikā Found at Gilgit, in *Studies in the Literature of the Great Vehicle: Three Mahāyāna Buddhist Texts*, ed. by L. O. Gómez and J. Silk, the University of Michigan, 1989, pp. 89-139.
- 8 E. F. Pargiter ed., *Vajracchedikā*, in the Original Sanskrit, Stein MS., No. D. III 13b, A. F. R. Hoernle, *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*, 1916, pp. 176-195.
- 9 このことについては, 拙論『金剛般若』ギルギット写本の特性—現存 Conze 校訂本との比較』(『金剛般若経の思想的研究』春秋社, 1999, pp. 59-91) にて論述してある。
- 10 なお, ギルギット写本 (*paścimāyām pañcāśatyām varttamānāyām*) とチベット語訳 (*phyi ma'i dus lnga brgya tha mar gyur pa na*) に共通した表現は, (2) 「後の五百年間に」(*paścimāyām pañca-śatyām*) と (3) 「正しい教えが減びつつあるとき」(*saddharma-vipralopakāle vartamāne*) という二つの語句に別れる以前の中間の発達を示唆しているのかも知れない。

〈キーワード〉『金剛般若経』, 法滅, 末法, 大乗仏教の成立, 仏滅後五百年

(東洋大学助教授)